「教学と現代 11」第３回
第２講：吉川裕利「中国（大陸）伝道の現在」

金子　昭

戦前・戦後の中国の状況

葛上分教会の役員を務める吉川裕利氏は、幼小の頃、陸軍の軍人だった父の赴任地である奉天（現・瀋陽）で過ごした。2006 年８月、兄の吉川利雄氏と共に父の面影を偲び、現在の中国の状況を知るために、旧満州国（現・中国東北部）を訪問した。かつて同地のハルビン近郊には、数多くの天理教信者が移住した天理村があった。今でもそこは天理屯という名前で残され、跡地は学校として使用されている。神殿だった建物は今では文化センターである。

吉川氏の話は、最初にスライドで現在の天理屯の様子を紹介するところから始まった。天理教による中国大陸の伝道は明治 30 年代から始まり、終戦の時点では全土で 164 カ所の教会、139 カ所の布教所を有するまでに教勢を伸ばし、教育施設や医療活動も行われるほどまでに進展していた。

しかし、戦後これらの教会や布教所はすべて引き揚げ、その後も現地での再開は果たされていない。というのも、中国では共産主義政権が成立したからである。中華人民共和国憲法では「信仰の自由」は保障されているものの、宗教の布教・宣伝活動や宗教組織の設立等は禁止されている。万一違反が摘発された場合、厳しい罰を受けることもある。

これについては、葛上分教会でも苦い経験がある。あるとき北京市内の個人宅に教友の集まる拠点を設けた際、皆で信仰行事を行ったところ、隣人から何をしているのかと苦情が来た。このとき、苦情を直接、公安に届けられなくて安堵したのだった。

現在、中国で行われている天理教の活動は教育・文化面のものであり、吉川氏は講演の中で、葛上分教会におけるそうした交流活動について主に紹介した。

日本語学校の開設まで

葛上分教会による中国との交流が始まったのは、梅華会の活動が一つのきっかけとなっている。梅華会は、日台親善と天理教の伝道支援のために 1967 年に設立された天理教有志の会で、年１回の台湾親善訪問を通じて車椅子などの寄贈をはじめ、様々な日台交流活動を行ってきた。（1967 年という年は、三濱善朗氏が８代目の台湾伝道庁に就任して渡台し、台湾伝道庁仮事務所が設置された年でもある）。

1972 年の第２回の梅華会台湾親善訪問の際、台湾に向かう飛行機の中で、吉川利雄氏は中国でサッカーチームの監督である李正日氏を紹介された。その後、李氏の兄弟や親類も来日することになり、中には天理大学や天理教語学院で学んだ者も出るようになった。また、鳴門教育大学大学院に留学していた劉振成氏とも知己になり、李氏と劉氏を主な核として、葛上分教会では、中国人との交流の輪が拡大していった。

そうした中で、中国で人々がつながり、助け合う機関としての日本語学校を創設する機運が高まっていった。そのためにはまず、日本語教師を育成しなければならない。そこで、同教会の青年の田中昭司氏が天理教語学院に入学し、日本語教育法について学び、さらにその後、北京で劉氏の自宅に下宿しながら中国語の研鑽を積んだ。劉氏の住まいは北京の東玄関とも言われる通州区にあり、ここは戦前、崇文分教会の部内教会や通州天理日本語学校があったゆかりの地域でもある。

【写真：吉川裕利氏】

2009 年 12 月、英語学校だった北京市内のＯＫ語培訓中心を買収。北京康思利国際教育諮詢中心を設立し、念願の日本語学校を開校した。その前月には葛上分教会百周年記念祭が執行され、中国からも 10 人が帰参した（このときの海外からの帰参者は中国以外にはオーストラリア、台湾、シンガポール、イギリス、タイからで、計 60 人に及んだ）。

北京康思利国際教育諮詢中心は北京市内のオフィス街のビル 10 階にあり、日本語だけでなく英語や韓国語のコースも設置した。主任総経理は劉氏が、日本語主任は田中氏がそれぞれ務め、ＯＫ語培訓中心からの生徒 70 人も引き継いだ。翌 2010 年には教師７人、事務員５人、生徒数は 98 人にまで至った。

このように日本語学校は順調にすべり出したのであるが、その理由として、吉川氏は、（１）一人っ子政策で親は自分の子供に高い教育を受けさせたいというニーズがあったこと、また（２）北京オリンピックの開催（2008 年８月）により外国語学習熱が高くなっていたことの２つを挙げた。

困難な状況の中での抱負

ところが、オリンピックが終わると景気が低迷を始め、政府は建物の所有者に対して税金を上げてきた。葛上分教会は学校の経営権のみを有していたが、ビルの所有者からきわめて高額のビルの使用スペースの買い取りを迫られ、せっかく軌道に乗り始めた北京康思利国際教育諮詢中心であったが、２年６カ月でやむなく閉校せざるをえない事態になった。田中氏は北京市内の別な日本語学校に移籍した。

その後、同じく葛上分教会青年の宮田和紀氏が中国に派遣され、2013 年には吉林師範大学で日本語教師として採用された。葛上分教会の方針として、海外に出る若者の心に、しっかりとした神一条の信念を抱き、常に心に喜びを持ってつとめてもらうように尽力することであると、吉川氏は述べた。また、現地との友好関係ができれば、日本での受け入れ意識も変わるので、海外の人々を迎えるにあたっても心配りを忘れないという。

たしかに中国との交流関係は決して容易ではない。共産主義政権であることに加え、領土問題など国家間の対立によって、せっかく準備していた公式訪問の企画も中止になるなど厳しい事態も起こっている。しかし、草の根のレベルでの交流は決して変わることはない。天理の土を踏んだ人はだれもが親子・兄弟姉妹の関係としてつながっていくものであり、そして実際にそのようにつながっているのである。

今後も、葛上分教会として、中国との民間外交の友好交流の一翼を担っていきたいと、吉川氏は力強く語った。